

統合失調症における自律神経機能の経年的変化
-ホルター心電図の周波数領域解析による検討-

【目的】

本疾患の自律神経機能は多く陽性症状により活動性が減弱し、その横断的検討にて年代に関係なく抗精神薬投薬量との間に負の相関があると報告されている。これらの点を踏まえ、今回は同一症例を対象に10年経過後の自律神経機能に関して縦断的検証を試み加齢・身体的 ADL・抗精神薬投薬量との関連について検討を加えた。

【対象・方法】

対象は統合失調症4名(男性3名、女性1名)であり、初回記録時年齢が51歳～81歳(平均年齢65.3歳)、抗精神薬物の平均等価用量 473.1mg。周波数領域解析は自律神経機能に影響を及ぼす外因性影響の比較的少ない22:00～6:00までの連続8時間を標本時間とした。解析項目は副交感、交感神経の各指標である HF・LF・VLF の3項目について視覚定性および定量評価を行った。

【結果】

- ① 加齢との関連 : LF、HF は1例を除く3例が漸次低値化し、このうち2例の VLF が漸増する経年的成績が得られた。各成分の相対的比率は4例の LF/HF、VLF/LF に著しい差異を認めた反面、LF・VLF/HF は3例が漸増した。
- ② 身体的 ADL との関連 : 車椅子で自走し要介護度1と判定された1例は他の症例に比較して全ての周波数成分が有意な低値を示した。
- ③ 抗精神薬投薬量の影響 : 幻覚・妄想の増悪により投薬量の調整を必要とした2例を含め、抗精神薬投薬量と自律神経活動との両者間には関連性を裏付ける所見が見出されなかった。

【考案】

以上のように統合失調症4例の縦断的検討では自律神経活動が加齢や身体的 ADL の低下に伴い減弱化することが裏付けられた。一方、抗精神薬投薬量が必ずしも影響を与えなかった点に関しては、その主な要因として自律神経活動の指標である各周波数成分に無視できない個体間格差が関与しているものと推測された。

【結語】

統合失調症の自律神経機能の評価する際は殊に個体間格差の存在を配慮することが望まれる。